

コロンビア大統領選と和平合意の行方

田村 剛

コロンビアで半世紀にわたって武力闘争を続けたラテンアメリカ（中南米）最大の左翼ゲリラ・コロンビア革命軍（FARC）が政府との和平合意に達してから約2年。FARCの武装解除が終わり、国内紛争の完全終結に向けたプロセスが進む中、合意内容の見直しを掲げる政治家が今年8月、新たな大統領に就任した。6月に行われた大統領選の決選投票で左派候補を破って当選した右派の前上院議員イバン・ドゥケ氏（42歳）だ。

ドゥケ大統領は、和平合意が小差で否決された2016年10月の国民投票の際、「ゲリラに譲歩しすぎている」と当時の政府の姿勢を批判し、「反対」票を投じるよう呼びかけた主要メンバーの一人。いったん否決された和平合意は一部に修正を加えた上で議会で承認されたが、ドゥケ氏は、和平合意が依然としてFARC幹部らに刑罰の免除や政治参加を認めている点について見直しを訴えている。

1964年の結成以来、武力による社会主義政権の樹立を目指してきたFARCにとって、和平合意に応じる際に最も譲れなかった点の一つが、武装解除後の自由な政治参加の保証だった。前提を覆すような強引な見直しは合意そのものを崩壊させかねない。内

戦状態の完全終結によりやく希望が見え始めた矢先、ドゥケ政権の誕生でコロンビアは新たな局面を迎えている。

「残虐な罪を犯したゲリラは処罰すべき」

ドゥケ氏とはどんな人物か。執筆者は2016年10月、上院議員時代のドゥケ氏に単独取材する機会を得たことがある。当時のファン・マヌエル・サントス大統領が主導した和平合意が国民投票で否決された直後のことだった。ドゥケ氏は2014年に上院議員に当選し、政界に足を踏み入れたばかりだったが、和平合意の反対運動を主導していたアルバロ・ウリベ元大統領の厚い信頼を得て、運動の中心メンバーとして駆け回っていた。

和平合意はFARCの元戦闘員に大幅な刑罰免除を約束し、2018年と22年の国会議員選挙では、得票が満たなくても上下両院でFARCに5議席ずつ与えることを保証している。オレンジ色のネクタイ姿で現れたドゥケ氏は、そんな和平合意の内容を否定した国民投票の結果に満足げだった。「残虐な罪を犯し



大統領選で勝利したイバン・ドゥケ氏（左）を大統領府で迎えたファン・マヌエル・サントス大統領（コロンビア大統領府提供、2018年6月21日）



武装解除前のFARCの戦闘員たち。コロンビア南部の野営地の広場で点呼を取るために整列している（執筆者撮影 2016年9月20日）

たゲリラは処罰するべきだ。議員として政治参加することも認めない」。厳しい主張とは裏腹に物腰は柔らかかった。この若い政治家が2年後に大統領に就任しようとは、当時の執筆者は想像もしなかった。

サントス氏の任期満了にともなう行われた今年5月の大統領選で、ドゥケ氏は39.14%の得票率で首位に。かつてゲリラ戦闘員だった経歴を持つ元ボゴタ市長の左派グスタボ・ペトロ氏が得票率25.08%で2位につけ、両氏の間で6月に決選投票が行われた。和平合意を巡り、ドゥケ氏が刑罰免除や政治参加の見直しを掲げたのに対し、ペトロ氏は合意内容に基づいてプロセスを進展させると約束。ドゥケ氏が53.98%の票を獲得し、41.81%だったペトロ氏を破った。

表1：コロンビア大統領選の主な候補と第1回投票の結果

候補	主な経歴	得票数	得票率 (%)
イバン・ドゥケ	前上院議員	7,569,693	39.14
グスタボ・ペトロ	前ボゴタ市長	4,851,254	25.08
セルヒオ・ファハルド	元メデジン市長	4,589,696	23.73
ヘルマン・バルガス	前副大統領	1,407,840	7.28
ウンベルト・デラカジェ	元副大統領	399,180	2.06

表2：コロンビア大統領決選投票の結果

候補	得票数	得票率 (%)
イバン・ドゥケ	10,373,080	53.98
グスタボ・ペトロ	8,034,189	41.81

後ろ盾に対FARC強硬派

FARCとの和平合意で内戦状態にやっと終わりが見え始めたにもかかわらず、その見直しを訴える人物が大統領に当選した選挙結果は、一見奇妙なものに見える。それは2016年の国民投票で和平合意が否決され、世界を驚かせた状況にも重なる。

米国でのキャリアが長かったドゥケ氏はコロンビアでの政治経験が少なく、知名度も低かった。それでも大統領に当選できた最大の理由こそ、国民投票の際に反対運動の中心になった対FARC強硬派のウリベ元大統領が、後ろ盾として存在していたことだ。ウリベ氏は2002年、長年続いた二大政党制の枠組みを破って大統領に当選。和平交渉よりもゲリラとの対決姿勢を打ち出し、2期8年の任期中にFARCに大打撃を与えて絶大な人気を得た。今年3月の国会議員選挙では最多得票で上院議員に当選し、衰えぬ人気ぶりを見せつけた。当初、ドゥケ氏の支持率は世論調査で1桁台だったが、ウリベ氏が党首を務める民主中道党の候補に選ばれるとトップに跳ね上



コロンビア北東部の町で和平合意に反対する垂れ幕を掲げる住民。国民投票で「NO（反対）」に投票するよう呼びかけていた（執筆者撮影 2016年9月30日）

がった。

対立候補のペトロ氏が左派だったこともドゥケ氏に有利だった。隣国ベネズエラの左派政権下で経済危機が深刻化するなか、左派大統領が誕生すればコロンビアもベネズエラのようにになると危機感を抱いた人々がドゥケ氏に投票したためだ。ペトロ氏は急進的な社会主義政策は取らないと訴え、ウリベ氏に批判的な人々の票の取り込みを狙ったが、有権者の疑念を完全に払拭することはできなかった。

1度目の投票で3位以下で敗退した候補の中には、サントス政権でFARCとの和平交渉団長を務めたウンベルト・デラカジェ氏や、同政権で副大統領だったヘルマン・バルガス氏ら和平推進派がいた。こうした候補が決選投票でペトロ氏支持の姿勢を打ち出さなかったこともドゥケ氏の勝利につながった。

左派候補が歴史的な躍進

左派のイメージが一部の有権者にマイナスに作用した一方で、今回の選挙は左派候補が決選投票まで勝ち進んだという点で歴史的でもあった。もともと政治に保守的な色合いが濃いコロンビアで、左派候補がこれほど支持を得たことはかつてなかったからだ。

ペトロ氏は1990年代初頭に合法政党化した左翼ゲリラ「4月19日運動」(M-19)の戦闘員だった経歴を持ち、今回の選挙では格差解消や社会保障の充実を訴えた。若者らを中心に支持を伸ばし、ボゴタ中心部の広場に支持者ら数万人が集まる場面もあった。

かつてない左派躍進の背景にあるのは、和平合意がもたらした変化だ。左派ゲリラのFARCが武力闘争を続けていた間は、左派政治家は多くの市民にとって支持の対象にはなりにくかった。暴力が横行し左

派政治家が次々と殺害されていた状況も、政治から多様性を奪っていた。だがFARCが武装解除し、半世紀以上の内戦状態に一つの区切りがついたことで、汚職を繰り返し富裕層を優遇してきた既成政党に反感を抱く人々の間で、左派候補が受け入れられる空気が生まれ始めている。



ボゴタ中心部の広場で「犠牲者は平和を望む」などと書かれた紙を掲げ、内戦終結を求める人々。和平合意が国民投票で否決された後、各地で平和を求めるデモが相次いだ（執筆者撮影 2016年10月12日）

支持伸び悩むFARC、候補擁立できず

左派候補が躍進した一方で、政治参加を目指すFARCの支持は伸びなかった。FARCは2017年9月、合法政党「人民革命代替勢力」（頭文字から略称はFARCのまま）への移行を宣言。既成政党に失望した低所得層の取り込みを狙い、まず今年3月の国会議員選挙で候補70人以上を擁立したが、誘拐や麻薬密売を繰り返した元ゲリラに対する国民の反感は根強く、得票率は全体の1%にさえ達しなかった。結局、和平合意で約束された上下院の計10議席以外では議席を獲得できずに終わった。

大統領選では当初、元最高司令官のロドリゴ・ロンドニョ党首が出馬を表明した。しかし、心臓の病気で手術を受けたことや、各地で選挙活動への妨害行為が相次いだことを理由に断念。ロンドニョ氏が遊説先で石や卵を投げられたり、党幹部の演説が中止に追い込まれたりする混乱も起きた。こうした動きの背景には、和平合意反対の訴えを通してドゥケ氏やウリベ氏がFARCへの反感をあおってきたことも影響している。

FARCは1980年代にいったん政府と停戦協定を結び政党を設立したが、反左派勢力に多くの党員を暗殺され、戦闘を再開した経緯がある。FARCの政治

参加は和平の行方を左右する重要な鍵だが、和平合意後の約2年間ですでに元戦闘員ら数十人が殺害されており、和平の進展に深刻な影響を与えかねない状況だ。



ボゴタで新政党「人民革命代替勢力」（FARC）の設立を発表するイバン・マルケス元司令官（中央）ら（執筆者撮影 2017年9月1日）

合意見直しには大きなリスク

ドゥケ氏のもとで和平合意はどうなるのか。これまでの主張からドゥケ氏がFARCに対し強硬姿勢で臨むのは明らかだが、合意内容の見直しに実際にどこまで手を付けるのかを予測するのは現段階では難しい。

そもそも、合意内容の修正は口で言うほど簡単ではない。2017年8月、執筆者は当時のサントス大統領への単体会見で、大統領選の結果によって和平プロセスが頓挫する可能性があるか尋ねたことがある。サントス氏は「和平合意の内容は憲法にも取り込まれている。見直しは法的にも政治的にも不可能だ」と断言し、こう強調した。「私の後を継ぐ大統領が誰であろうと、合意内容は守らなくてはならないだろう」。実際、コロンビアの憲法裁判所は2017年10月、サントス政権後も政府は和平合意の内容を尊重しなくてはならないとの判断を示している。合意内容の修正にはこうした問題をクリアする必要がある。

見直しにともなうリスクも大きい。FARCにとって、刑罰免除と政治参加の保証は和平合意の根幹だ。ここを見直せば、合意の前提そのものを覆すことになる。FARCが武装解除を終えたとはいえ、内戦の完全終結のプロセスはまだ道半ばだ。和平合意後もFARCから分離した1,000人以上の元戦闘員がゲリラ戦を続けており、新政権が合意内容を守らなければ、さらに多くの勢力が合流する可能性もある。

サントス氏は和平合意を主導した功績が評価され、



コロンビア南部で、武装解除によって銃を捨て新生活の準備をするFARCの元戦闘員ら（執筆者撮影 2017年6月23日）

2016年にノーベル平和賞を受賞した。ここまできた和平合意を新政権が崩壊させては、進展を見守ってきた国際社会からの非難も免れない。サントス政権はFARCに次ぐ第二勢力の左翼ゲリラ・民族解放軍(ELN)とも和平交渉を続けてきた。新政権がFARC

との合意内容を今になって見直せば、政府との合意そのものの信頼性が失われ、ELNとの交渉にも影を落としかねない。

大統領選の勝利宣言でドゥケ氏は「犠牲者の救済がプロセスの中心となるような修正が必要だ」と述べ、合意内容の見直しを改めて訴えた。一方で「和平合意を壊しはしない」とも明言。「私はコロンビアの団結のために全精力を注ぐ。これ以上の分断は存在しない。憎しみで政治は行わない」と強調した。当初の主張に比べると、当選後の発言内容は少し軟化したようにも見える。

合意内容を見直す難しさとそれにもなうリスクの大きさを、ドゥケ氏が理解していないわけではない。後ろ盾であるウリベ氏ら右派勢力の声に応えつつ、一方で和平合意そのものはいかに維持するか。公約と現実との間でドゥケ氏は難しいかじ取りを迫られることになりそうだ。

（たむら つよし 朝日新聞前サンパウロ支局長）

ラテンアメリカ参考図書案内



『被抑圧者の教育学 50周年記念版』

パウロ・フレイレ 三砂ちづる訳 亜紀書房
2018年5月 407頁 2,600円+税 ISBN978-4-7505-1545-8

20世紀を代表する教育思想家といわれるブラジル北東部生まれの教育学者・哲学者フレイレ(1921～97年)の代表作で、1968年に出た原著英語版の日本語訳は1979年に出版され版を重ねてきたが、2010年に1990年代に約10年間ブラジル北東部で母子保健活動を行ってきた公衆衛生研究者で作家の訳者がポルトガル語版から翻訳したものに、この程米国の出版社から出された出版50周年記念版の前書きと後書き、「同時代の学者たちへのインタビュー」を加えた新訳。

厳しい自然条件の下で、豊かな南部等の「中心」に収奪され、貧困から出稼ぎに出る者の多い北東部に生まれ育ったフレイレによれば、この世界には抑圧する者たち一無知、貧しさ、人種、階級、ジェンダー等によって抑圧されている者たちがいる。教育が不正な状況下で抑圧のツールとして教師が生徒に知識を溜め込ませる「銀行型教育」から脱却して「対話的教育」へ、それを妨げる支配者が用いる分割統治やポピュリスト指導者による大衆操作にみられる「反対話行動」と、それに対する相互信頼に基づく「対話行動」をキューバ革命運動中のゲバラと農民との関わりを例に論じている。本書は教育学の理論書ではなく、フレイレの行動と実践に裏付けされており、教育分野の人だけに留まらず特に開発に携わる人たちにも長く読み継がれてきた所以である。

（桜井 敏浩）